誹諧七部集

地

911.3
八

阿羅野

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名を
あら野といふ何故に此名有事をしらす予はるかに
おもひやるにひとゝせ此郷に旅寝せしおり〳〵の云
捨あつめて冬の日といふ其日かけ相続て春の日また
世にかゝやかすけにや衣更着やよひの空のけしき
柳桜の錦を争ひてゝふ鳥のをのかさま〴〵なる風情
につきていさゝか実をそこなふものもあれハにや
いといふのいとかすかなる心のはしの有かなきかに
たとりて姫ゆりのなにゝもつかす雲雀の大空にはなれ
て無景のきはまりなき道芝のみちしるへせむと此野
の原の野守とはなれるならし

元禄二年弥生　芭蕉桃青

花三十句

よしのにて

これは〳〵とはかり花の芳野山　貞室

きぬまつくせぬ宿の花のあるし哉　路通

[illegible]白雲かゝりける[illegible]の林哉　信徳

[illegible]　展風

[illegible]植し花の後の鬼瓦　友五

山里は吟くとの声ある花見哉　尚白

何ことそ花みる人の長刀　去来

みよの雲すてしハ花もまつさかり　野水
さくらの頃ハ戸ごとに茶のみかな　亀洞
木のもとの穴ことかれん花の名　越人
花の山常寂くふる枝もなし　一井
みよしのゝ山ふみもまたぬ花の盛　津島 俊似
此寺のいつは咲くる花の蔭　嵐蘭
ちる花ハ酒の人よりよし　舟泉
冷汁に散るもよしや花の陰　胡及
ちる花に降ても傘をさまくし　去江
紫宸殿の花盛りに雨の雨　津島 卜枝
かきしまふよかれく花の枝　岐阜 落梧
連さそふ川や淀より花の射　荷兮

跡積の跡まて見ゆるさくらかな　傘下
あらまきや風車売る花のまへ　落英
花にきてくらしわつらふゆふへかな　亡つ
山あひの花を夕日にみおくりて　心苗
松かえや理趣経人の花の雲　越人
なかなかの花やさかりの枝に汲れ　世雨
楊葉なく遊ひくらすや花の山　重松
花寄るとけり昔みる尾上より　冬文
首出して見の間煙より　荷兮
淵のうへ座する人の緒に
身を花になしてく湯の山ひとつかな　旦藁
かへる人の山寺まいりすゝく

櫓の声のまぎれはなかりけりすゝしかな　仝

杜宇　二十句

ほとゝぎす正觚さくあまに飛びて旅の宿

もろ葉の蒸の日こもりん郭公　李吟

月に八まも山ほとゝぎす初ゆかれ　素堂

燕子も井しに啼かゝり蜀魄　鶏雪

蝋燭のひかりあうしやほとゝぎす　鉄人

松ぬし子の皐ねすりや時鳥　津嵜 松下

猶や先気の附く聖の時鳥　金五

ほとゝぎすされかゝりし聖の魔き　柳風

ある人のもとにて衾白せしにまされて

ほとゝぎすちくらのまゝ鳥かれ　嵐蝶

蝶鳥の舟漕行やほとゝぎす　茂枝

堀賃臭き稲見らつや時鳥　一髪

三声までほとゝぎすの朽かゝりや郭公　仝

涅槃会

ほとゝぎす十日ちかき飛鳥　風家

謎しきや襟々もえのほとゝぎす　香雨

あかつきの跡の郭公時鳥　傘下

うつゝや力ゟ啼きほとゝぎす　仝

夏も過るとまゝあかゝり郭公　鈍可

たくあの胴の身を離れると答ヶ井に　大森

家入れて物らき人ゝ郭公　智月

うつゝもとうつゝきかゝる時鳥　李桃

うつろひし美のなそかくしきに　市山

月　三十句

かるくと無のうへから月出て　梅吉
そこ見つても月見る中の嬉しかれ　湍水
月出るまゝうかちの今宵かな　一雪
萩の月ともとらなしの露あり　越人
みつくまゝにか朧く月出で　昌碧
劉はくらきの實もたけき月の影　市狗
杜うしなまねかく添ふる月出て　一發
ましと見ても見え細し月の出るに　長虹
嫌ひて猩猩く月見ゆる　仕他
一ツ家やうへとたえる兄子の月　維絹

名月ハ我明らしらせをあつけつら　越人
名月やとつくまゝ十二六ひとつあつくり　文鱗
名月やうらのあさくあそくつくあくに　昌碧
やハさなやたつうしくあつくいえの舟　傘下
名月や鶴の影と大の乙ゑ　二水
つんさるあのさ見えてさく人の月見かな　聊氷

名月の　とのそさゝ―

むかうと月出る日ハ出て糠し　荷兮
いつの月も形ぞ忘れく気くし　仝
名月や海も松ある人も見る　杢来
名月や下戸と上戸のむかう茶　胡及
名月ハあつき泉を身くぬ杖つる　湯古

青よみし拾へ…や月の影　一鷺

十三夜

新蕎麦も夜半…月…　杉風

朔日

菊…の…海の…　蓼…

二日

見る人も…のみ…　仝

三日

何事の見たてにも似ず三かの月　芭蕉

四日

夕月夜…　卜枝

五日

何日…青の月　イヨ一泉

六日

…川…のむら…　蕪…

七日

…月…　一…

雪二十句

大津まく

雪の日や船頭どのの顔の色　其角

いざ雪見…ところまで　芭蕉

…　塵交

…　泉加生

車…　カヽ小春

ちる雪のたゞくらくらと数芝なり　越人

はつ雪に戸明ぬ留守の菴かな　示幸

まのあけの姥くぬかも雪のつもりかな　松芳

ふくきに松の楠陰りんとくつ雪の隈　二水

雪降く家の軒端の雀かな　鬼仙

松の雪枝ともなきやうに枝折らん　除風

ゆきの日や川舟乗りのかなしさよ　路汀

初雪や打ちよせたる舟の舳先　傘下

雪の江の大舟よりも小舟かな　半川

雪の朝鶏の声もかれし声　冬文

雪の暮松の木や夕暮の色　桂夕

あらくや淡雪かゝる浜縮緬　荷兮

ちり川雪や先菜籠にも浸す也　路通

はゆくれし雪の朝さそはれ　野馬

ふりかけくいくつにあれぞ浅の雪　荷前

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

誰人の手からもおなじ花の春　紀 吉純

いつはりや千年のつもる縄　風麦

松のうち伊勢の家實人が殊　其角

ちるかな蓬萊のあくるも青　文鱗

月花のあるじなるもきのふ門の松　去来

かきぞめや年あくる梅が枝　一晶

ふるとしや行くとしの暮の春　路通

元日ハ明すましてもおもふかなも　一笑

遠国より梅の花なる白みかな　如行

鶯の社老なくゝねぐらの春　薩摩 蕉梅

鶯に折りかけて見よや今朝の梅　座内

独酌酒や屠蘇ゆ汲む二日の春　同

とうとうの名をつけて見む宿の梅　昌碧

去年の春ちからを尽しつ若菜哉　宗廣

小桃子霞やひろげむ星のたね　舟泉

とし男手に楽を取るのぞらり　同

山楽はうらく白ゆかしる筆かな　宰色

松きらし引結びて年始はそこ　鶴雪

月宮の神を鏡臺の小ぶちかな　全

連ねて千代の世の万歳かな　一井

かくる白もそよぎかへる翁の若水かな　胡及

日のおもむきを来る去年の年の海　長江

とんぼ飛ぶ縄ゆるしもなく柳かな　嵐漳

草の日うやふりの西ゆかりるかん　同

蓬莱の苔の酒のふんだんくゞ　端方

備ふる神を米くるゝ軒の春　条 己見

のかえやうしの具ハいろかん　朴竹

まつちのとはる長る遥かみ　冬文

正月の魚のうしらや雀ぐら　傘下

冬この春家しくまるる閑の部　冬松

出てくる松を宮門をたのみかや　柳風

大被八十年の青春の光かな　諸川
貴さの盃のまゐれ年々かな　太山 昌猪
傘に蓮花ちりてちりて文字桐　文左
雑子ちりて松の花ちりてちる松の春　梅舌
たそくれの雲やうつる大かゝみ　毘右
燈火も雲や秋やたつうふくらち　仝
すゝきの穂かそこ見え名もさ鷲鳥く　越人
秋の夜や活名の稲のその下陰　仝
青川や苦ほ時雨さて宿きて違　門
万葉の母子涙に明けの春　荏子
己のふりやむしの声の松の秋へふる　門
飯八妻国の出ち出ち生川毛外　信門 般齋

嘉平戊乙年の春か本文おかて松の春　貞室

初春

よ葉つむ分ら来ま割細外　越人
精神しく掃き雪の雪外　野為
さ子の正月えきふうろしく注ぎの外　津島 後似
女郎しく雲路之川松との光　小春
御座しく秋の松ゆき稲穂　采維
宿とうもの とし ての芭蕉外　岐阜 素秋
石切くつるきとを梅松へ冬の　宗齋
窓くれし松のゆきし梅乃花　路步
せの妙日の霧のつゆかの花　越人
数ゆくまのれはよみまれ桜の花　淡梧

梅ちりて あくる目つらし 地布かな　一嘯

舞子も やすき 也ゑのすへつを 松にまし　ゑ松

みのむしと 見れつる 梅のさくらかな　其蓋

網代民部の息に逢て

筆の先 よき母を 老を 梅の花　芭蕉

うくひすの 啼そと見る 嵐の那　嵐雪

嵜の 啼や 餅ひろふ 行まらも　去来

あをわのや 嵜をよ みるそ 羽織　一相

嵜よ ちりの花 花も 梅く 見し　一笑

うくひすの 代に 声よ 勝つる 地布かな　市樹

嵜くりも たちも 見の 彩 急　夢々

うくひすや 次と 次 あり まよ 花　林音

ちりまかも 老みの 花 あの 寒り 郎　地玄

うくひくも 梅のうへ も 扇の 郎　塵交

うくひ人の 蓑 松 も 見れ ぬ 家 郎　ゑ交

かれ なき や やまと ゆけろ への 一二寸　芭蕉

うきもの 宿 や 馬の 眼の あらく と　傘下

の仙の ゑとろ 色を あよ 顔 くゑ のう　路通

嵯峨も 花 時を ゑしく 寒や もの 枝　芬芳

　嵐雪亭にて

きし木

つまきある と 硯の めをゑ まさる 実　舟泉

　棒木

つまのや うへしく ぬる 猿 賤 かな　傘下

猿

暁の汐飛くめぐる渡しかれ　蓉子

日

藍瓶く蝶慕のつくねつくて春　下枝

春雨

去る風人の世の恋ごとよりも　湯水

日

来の雨すとも出雲と　と　よ　萬獐

雨尾花

なやらあひの萩つきまで白尾花　雅子

橋の井くまで恋かくる苗木かれ　寄生

立田りし家の草見ている帆影　下野 幽助

すとくと鶴の柳なりに　春泉

すとくとつかやつまぼや松の春　其角

すとくと宗匠の声松の春　其堂

去梅やそとてよそくてるつくし　雄軍

川面やそよぎのくくつむつくし　多丈

津らくし深山よりあすまつひとかけ　春江

蘭亭杜ゝ人此の柳を見て筆を作り

此の桃あし　假名出あまる人柳陰　素堂

風の吹く方を渡の柳う那　登水

紛るも影しとるかり柳形　越人

さらし柳さくまるりて枝の中へ　一笑

天きらりよりや面そよぬる柳かな　小春

すかれく柳人風のまゝぞつくり紅　一笑

とう〳〵と残るを見るやまきつかな　昌碧

さゝれとも桜のゆらきぬ柳かな　杏雨

ちら〳〵と塩よのつるく柳かな　此橋

此風よ芽のうきさむく柳かな　杏雨

此風よ霽るゝとよするゆるされ　松芳

ちせてふうぬ日へわるあるの柳かな　梭灘

いそかしき世の淵瀬を志て柳かな　萩子

輝々涌りみつる月の柳かな　日

青柳にあしられて通る車かな　素狄

川いきるよ旅人とろふ柳かな　琦歩

薫の名へ忘れしもの植ゑよかな　生林

仲春

麦の芽の文草木のそれゆゑる嵐かな　子梅

草木の花や杉菜の立よのむかくて　孝紅

なのはなの案山子よつる日影かな　傘下

なの花の畦から　のとにうつるかな　清間

うらゝくとまつたるくさく畑のかな　玄来

万象に仕舞ふ今宵やそる菜雨あま　昌碧

つれ〳〵さまそれそへらくさくかな　越人

麦くさよ一本植しさゐるかな　祭中

さきく〳〵義りきて 咲きけり　除風

まのとぐくわとく我くて椿かな　一橋

うしろよりつれてわる柳の椿かな　重松

すゝしくと山やられさむ咲きゐる　一髪

さゝ夕風にちりくる〳〵ふる雲雀かな　吹水

あふのきて掠とむ艸むしの雲雀かな　徐風

寄る浪をつゝむあらひ　鶏子られ　一雪

ひうちに編縄解くゆる　雛子かな　遠卓

手をつゝむ寒中あら秋　蟻ちらす　山崎 宗鑑

鳴きるゝいはあれ空のねかきつゝる　落梧

あらつきをひらりしきるに　鳴雉　越人

いくすんに骨折る岩のかきかな　玄来

花かゝまし　あゆくかるゝかな　落梧

不図と飛ぶ渡に舟出る　雉かな　杢下

ゆふやさの麿細よひるうそつる　一井

まつ燐を旭光のちえ出て　無名かな　柳風

櫻欄の影のうつりて通る　杜鵑かな　柿餅

かやかやの舟をやゝあそこて念かな　吹玉

かれ芦や影のうつねて杜鵑　百葉

茶花集

何の気もつかぬ去年の蘆かな　忠知

ねふつしとる小家のあ葉中　荷丁

あかるくの虫とる　近い菫の秋　野水

雀ちる日の　きほ洞から菫かな　舟泉

草刈りく菫避出て　菫の那　蹈歩

此燐の山田のこ残らぬあさきかな　燿遊

麦畑の　人かくるゝの嬉しさ　杜国

木ける山や　樹の月の　すゝゝ哉　大坂 式之

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉

松明に山吹うすし夜の色　野水

山吹とてふのまきれぬあらしかな　卜枝

一重かと山吹のぞく中の人かな　嵓　襟雪

とりつきて山吹のぞく岩ねかな　同　蓬雨

わかるゝともゆくとも忘るな蛙かな　去来

去年の巣の土ぬり直す燕かな　俊似

いま来たといはぬばかりの燕かな　ちね

燕の巣を狙ひすまえるかな　去虹

菜畠にあまりてこぼれるつばめかな　嵐蟬

友滅て鳴まさるかや夜の鴈　且藁

角落てはづかしげなる小鹿かな　蕉笠

なかなかと濵くて戻るよ浦乃汐干かな　越人

杉やまも隠し餘寒や桃の花　傘下

人楽む舟と陸との汐干かな　三輪　友重

山まゆに花咲かぬる躑躅かな　荷兮

躑躅咲やなつかしそこの石垣の花　兼正

舞ひよき葛のかけりけりぬ蝶の舞　森朋

泉さき月や葉室路も人見たかる　卜枝

水さき月や沈丁花の上かゝる雲　野水

ゆふまのあさき嬉しさ花残しかな　同

初夏

ところまかへや白き梅のまつ汐　路通

更衣襟もおらずやたゞひとへ　傘下

ところもて人刀をさしてくつれ行哉　嵐蟬

　宵柏木のもとにあそひしゆふくれ
　香たくもの有けるに簾のうちより
　とくとくの折鐵人のもちきたる琵琶
　うたひ聞つけそのさま鏡の中にうつる
躑躅に簾をもゆるし衣更　荷兮

　山路にて
なる事も見て下葛の一ッ哉　芭蕉
いちはやき川へ杜とともかつもかな　一井
梢の木乃いはる本見る夏の哉　越人
切ちかのけり夏の花それも採哉　岐阜 不交
花に我かへりすくみなきものの哉　同 落梧

みはてなく夕立の行くのちもかな　鼠弾
ゆりくくとなりゆきまかる杜若哉　竹洞
ゆかりしく薄のあまたかゆる人哉　馳可
きけは山や下ゆく夜の沢の水　夢久
上まみにかりの種まく春一緒　素秋
枯るの八妻のかいうへ見る葉月哉　生林
妻のてて霧の床まゐりの秋哉　佐屋 和
むきのいくよいつ里乃葉哉　鄰可
あふ程をいひくるや家の嵐哉　嵐蘭
なるまくあゆみさけしの山哉　桂梧
つし夏く来る寛まいる夕哉　岐阜 李桃
大粒なるかとてえし茶の花　東巡

萎にめは 明そ 捨ぬぬ芥子の花　吉次

深川の庵にて

菴の夜もみじかくなりぬすこしづつ　嵐雪

さびしさの ほかに 杜わすれかほる香　野水

仲夏

雪のみえて 毎よりくる 螢哉　桜井 元輔

刈株の 高みに光る わたる螢哉　一髪

窓みくらき 障子をのぼる 螢哉　不交

闇きよりくらき人待 螢の船　風笛

夜細く 追はれぬ 沢の螢の影　杏紅

わが兜の袖ハゆするを 螢哉　倉佔

くさむらの 袖をうつて出る 跡つる螢　卜枝

あ汲て酒ある袖のかくる哉　蹄歩

ある人の葬室をきゝてこれを見

こくらうと のぞく東寺の 影螢哉　秋芳

垣のむれく 梅の一木の 茎螢　小春

うなかみよ 焼ふせく あかりの螢　杏雨

雨のくれ 傘乃うちに 花螢哉　二水

蝦乃瘡て 澄のうちとまる螢　一笑

藤の花さこの 深きる螢の 影ぞかな　胡及

汲引く 藤の花 おちむ 着ゐる　児竹

ほの伸くく 姫百合 手おれ 露の螢　此橋

竹乃子よりも 蛍さけくすまふ螢　長虹

筆紙 時よりさきの 螢の竹　去来

閑さにたへかねてなきやむ鶉かな　野水
あくる日に柿まちかまる汀かな　大津　一髪
この比は小鮎よありぬ月夜かな　尚白
みる内は傘にまつるとをまつかな　亀洞
波阜みゆく
秋のりかゝりきらしきまとる蜻蛉かな　貞室
ゆりかゝりてやうくかゝりき蜻蛉哉　芭蕉
秋のしらぬく
蜻蛉のつくゝよ稲こゝわさ蜻蛉なり　荷兮
同
数ならぬ鮎の峰かゝん蜻蛉銅みな　越人

朝顔の秋をまちかね稲葉かな　傳兒
曲江に稲のはえぬるたねかな　杜国
鶏の巣のはえぬるあき人かな　野水
秋風の縁をはなれる寂しさかな　卜枝
松の根をかくれ地中の蜻蛉かな　俊可
蘭の香や流によこる雲の秋　仝
撫子や花緑出人をよこしなん　越人
涼しさや灯のとゝく宿のあさ　落梧
夏の夜やたまさかに紅葉の香里　且藁
宿の花のちるよ
まゆつくえはるさきまつ蕣の米俵　其角
夕かほや秋はいろいろの瓢かな　芭蕉

世の中の志ほれは人の志くれかな　睡水
又見ぬ夜の恋しの夕くれかな　佳香
山路来て又見える夕の哉　津山 李柳
名は夏ちるま又見ぬ哉　芦虹

暮夏

橘も動く雲あり蝉の声　畠碧
雲の峰嵐うけなたなひきけり　睡水
夕立に傘ぬらして垣根かな　傘下
おそしきに桜も夏の木陰かな　秀雨 助節
涼しさよ白雨のあと入日影　玄来
蓬しく涼しや岩の清水哉　荻下
木の間さす夜のあつさも無かな　[illegible]

松の風夜の人は遠くの夕すゝみ　松風
萩桔梗葉の中すゝみ　俊似
涼しさや樓の下ゆく水の音　仝
挑灯のともして通し涼み舟　卜枝
すゝしきを手すれは見る川辺かな　未学
波あらく夜の月に蓮の花　洲 秀正
蓮みな同し夕の露は白しらぬ　松坂 晨風
蛍火をとひてくゝる甚て蛍哉　古梵
河骨に夜の月見ゆる流れかな　英水
志らつくと志ら川に松の古葉哉　芸虹
すゝしさく汲干の沖の清水かな　俊似
蓮の葉にまつ露世く結ふ志らつかな　文酒

引よせて馬への手綱もちかな　傑月

かくれかね涼しさの濡かな　尚白

出る露をぬれほど絹のわかな　一髪

咲かしや幕をはる人の撫子　卜枝

麻の露皆こぼれけり風の緒　岐阜 李晨

蚊遣草涼に積る名残かな　越人

締れ花名まく蘭に採かな　素堂

初秋

ちかくとも麻ふるあきの秋の風　越人

梧の葉や秋と川ふく蜂の風　圓解

一葉散るうしろまで見えてゆく
雲ふる山雲路のちまた　仙化

うらめしのちらしや秋の夕しき　芳生

男さへ羽織をはづの向かな　杏雨

秋鳥は淋しさも盃のきりぎりす　昌碧

荻や娘のまくの思ひさま　文鱗

あさがほの白き寒さの夕かな　荷兮

手を打ちてあまりのひ袖の色をかへて

秋萩をとのとふるもゆくつまで　は

燈あるあさかな行まつしぐら　野水

あさがほや見くらべにけり月　胡及

萩よりも露の宿や寒の声　嵐蘭

秋風やあれまの弓に絃をかん　去来

待しさへ花ふるきり 暗鱸うれ　旦長

畦ことに竹□□□つるの□□□かな　蓼汀

まつ虫は通る路より鳴かはり　一髪

きりきりす蟷螂消て鳴かはり　素秋

あの雲は稲妻を待たより哉　芭蕉

いなつまやきのふは東けふは西　其角

家はれてすなごをこぼすや萩の花　舟泉

ひよろひよろと猶露けしや女郎花　芭蕉

桐の木のうつろにしき蘭菊かな　作者不知

艸むらやかゝる□□花薄かな　伏見 任口

一すちの□□猶□□□流れかな　荷兮

秋の人や娘ほしさの□□□□　胡及

蕣の□□□のこゝろなるかな

名月もしらぬ小寺の燈かな　素堂

とくとくの清水はさはることもなし　俊似

仲秋

かけ稲に鳥の上ける夕日かな　芭蕉

つくつくと□□る秋の□かな　小春

谷川や□□□□秋の夕暮　猿雖

石切の音も聞えず秋の暮　傘下

斧おとや□□□□秋の暮　卜枝

麻の葉や人も見る□文かな　一髪

田と畑と□□□□□かな　一泉

山寺の□□□□□□あり　室又

朝顔の□□□たる沖の月　其角

あかぬ人と虫のなくなるわかれ哉　東順

萩の井にわか葉見しらぬ立枝哉　林谷

ともゆかく地にまかする雪のしるく　越吾

つの字八ともかく秋の草葉哉　宗和

こゝろあし鳥にうつれはしれ
鶏も世にあらぬ秋と思ひけり　や　北枝

ありけ人まつのく
蓮の実のぬけつくしたる蓮の哉　越人

一本の芦の様雁しあかまつ哉　防川

松の木に蝶かくれもなし秋の蝶　丹癸

まろらしく猿も真蛇のころも哉　胡及

ひとつもかくらぬ帝のきぬかな　暁瀧

浅の草井におさめて
さなきだに猿もやしなき高津哉　其角

としのくれ
きりぎりすちそよる夜の世の墻ね
いそかしく野分の空の秋遠し　芭蕉

ゑゝ　一笑

暮秋
あさがほ　桃しろ菊の白き哉　己丈

ちらく菊のうつろひにけり
山路のきく露も雨もまちかねる　昌碧

一もとや　紅しね菊の花さかり　越人

萩かぶに霜の降ねする秋草哉
よく鳥啼ける声きゝれなれそ　暁瀧

かしこけの[illegible]世々や菊の花　其角

菊のつゆ潤る人や[illegible]帽子　同

[illegible]菊[illegible]　二水

かきくゝりて[illegible]の[illegible]　伊賀 千閣

淋しさは榧の実落る[illegible]　濃州 芦尹

[illegible]ものゝ[illegible]ちれや柿[illegible]　加生

芦の穂や[illegible]あられ　路通

ゆかぬく
あみうちの[illegible]時雨かな　湖春

京なる人は　うつりたる
一[illegible]三井寺さして初時雨　尚白

[illegible]松[illegible]　湍水

万句興行に

[illegible]人の[illegible]時雨かな　蕉[illegible]

人を待[illegible]
[illegible]　茂樹[illegible]

[illegible]の[illegible]のと[illegible]　欽[illegible]

[illegible]しつ[illegible]しれかな　傘下

[illegible]二月の[illegible]　蕉[illegible]

一[illegible]棹の[illegible]　一髪

[illegible]淋しき[illegible]　同

枇杷の花人の[illegible]木[illegible]　同

[illegible]　李晨

[illegible]の花[illegible]淋し　野水

薫たものから見ゆるや帰花　昌碧
まま始く暮殊にかなし蕃花　仝
ひとしや去年まくはる夜の白　一井
鐘の音さくみくおくるゝ鐘　落梧
石臼の破れくおもしやつその花　胡及
まくらもとくさらハかの里神　文鱗
あらしきれ翁よかる蕉かれ　卜枝
かる雅よ風の体うちるるき井くら　渭雪
蓮池のうらちハ見ゆる枯葉　一髪
寝るさへ石まつまつくうれ中　松芳
こらしよ吹よせしまの寝るの中　杏雨
寝る枯の江よひきたる去年の那　蕉笠

寒月

鴉なくなく月を雨の空　仲友
あさ漬の大根のうへの月寒し　俊似

仲冬

松しとしおく鍾鳴りたる霰かな　徐寿　珠壽
かくるゝとつれなくなりぬ霰かな　同　寺信
揆よするさゝ竹ゆへまじる霰かな　梅竹
紫の色をわよく君をかめなるかな　李雨
ゆくる姿せ妙ありせハめくれ哉　宗之
霜の枯せんしらんの実のとかれ　杜国
夜の網の葉の色がつまる氷かな　松吉
浮きて氷のとまらは板きかな　俊似

つきのりくまつ風ふきとるの花の花　除風

赤松のまく何となしのきみ程かな　秋芳

[illegible]雲冊

流より雲の森高山のきも埴生かな　嵐弾

ねつるまと雲の森の色の色なりかな　荷兮

水をともえく雲の森の雪あふりかな　長虹

ふる色より雲の森の紅に朝の雪　一井

雲の森の山や雛かは雲まうそふる　亀洞

つけくさくおろす雲の森の中の雪かな　金咭

青海や羽白黒鴨赤のしてら　忠知

高みつくゆきに変と見る佗の秋　亀洞

軽鮮をりえてゆかるる人のかな　村俊

井をかるの日よし六月宿かく　金枝

羊のなく男ふ帰る程なり

汗ぬくる谷と見とむ水の宝かな　利重

海の鳥の嵐の雪の紅の路かな　亀洞

炭竈の窄みめ煙り底けなり　暁車

擂粉木を洗るゆく雪のさしかな

火ともして炭をたくねむ杯　一笑

いのちまし庭紅せてる浪のさと　亀洞

ある人亀のまよりまたん迄よくら　芭蕉

歳暮

餅つきや内にもおらぬ風のこゑ　李下

魯がくらく思ひ曲りの年のくれ　尚白

もち花の陰ハくらくなりぬらし　如去

まろ近く櫓のきしる葉細かに　亀洞

礫うつひ柿くさけける瓢の形　一髪

本ゐるの月てあくる人のまゐけり

よそ柿乃実ひろふ松くゝる年

の蓋さうしあるはなき雲覧と

としのみれ柿の実ひてらくと　荷兮

门出よろしく哈一盃のひ　内習

田わの萬追ての影の寄せぬ　亀洞

雑

年中行事内十二句

供屠蘇白散

いとけなやとてのまで行く人ぞ有

其日参

そしらにる底乃夜のつまらぬ

石清水臨時祭

水鳥もしつまりさんとさくら川

灌仏

さつきのやつし洗ひ大仰に

端午

杉も棄ての菖蒲葺ける髪彦

施米

うち嘆ぐ行く尻出る出る

荷兮

乞巧奠

ゆふ空より七夕祭れ笑くよかし

鵲迎

爪繋も揺乃すゝきや雲むく

探虫

家のまゝや是乃おれるきりぎりす

十月乃花

おもきれ衣とくとうのかも花

西鶴

舞姫に来る也筏と打ちつる

追儺

打ぬるや眼をつぶるゝ鬼の面

詩題十六句　　野水

今日不知誰計会春風春色与時来

水ぬるし深きは清くうつる春の風

白沙落梅浮澗水

みの花のさしに付てうる梅白し

黄鳥乱飛閑遊少

花は鶯あるをにのまゝく隣くれ

蝶入

帰不忘帰園花家

人なつきものの門に出る花の下

留春春不留春帰人寂寞

ひきもとてくる人の外に野さのくれ

厭風吹袂衣不度不熱

縁側へ松が影ある閑さかな
池晩蓮芳樹
蓮の葉もひろふ長さる氣色かな
君見貧家何處有客來唯賭北窓風
涼風とて切ぬきたる北のまど
大底四時心總苦 就中斷腸是秋天
雲の旗をよこつくるなり秋の空
東來風雨後秋氣颯然好
秋の雨ふりて見る瓜よふみ入るなし
幸逢織女七夕 取ル星何欲曙天
花と散るひくらしまでも蟲の声
山影[illegible]倒月斜光月傍簷

獨り寝や涙をかるる露の月
万物秋容雅樹色
冬菊や世界を照らす秋の露
十月江南天氣好 可憐冬景似春花
とうしも嵐けぬ星つく小春かな
寂寞深村夜 殘螢[illegible]閑
浮ある虫もこゑひくや[illegible]
自從秋讀佛名經
佛名の礼よ響懐く[illegible]
[illegible]の[illegible]
きのう[illegible]
[illegible]夕日[illegible]

甘木実 みしし園に錦でかかし人の〔illegible〕

釣瓶縄 おくるきや淵のそこよりよる秋の里

糊貢 あきさめの音もわれもむつくさを

馬〔illegible〕 とかくしの松の葉のつきとつれ立く

李夫人

魂在何許香煙引到焚處

かけろうの抱つれそひしところもなし

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覚 花冠不整下堂来

春風の常ににほふる〔illegible〕の〔illegible〕

越人

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細長

一 かく人の具々〔illegible〕

その〔illegible〕や〔illegible〕

西施

宮中〔illegible〕君

〔illegible〕 牡丹の那

王昭君

黒髪風沙勝畫圖

〔illegible〕

一日〔illegible〕

〔illegible〕

鶴雲

卯

辰

巳

午　あらむかしよ蔵王一上手蜻蛉とも

未　蝶乃[illegible]武家乃文会[illegible]

申　[illegible]や[illegible]

[illegible]生[illegible]

山鹿　[illegible]の上手を[illegible]　樹水

[illegible]　[illegible]の[illegible]　児行

里虫　[illegible]蜀[illegible]　倉咕

海魚　[illegible]月　仝

川魚　秋の[illegible]　倉咕

牛馬四足是是謂天落馬首穿牛尾

是謂人

一方ハ[illegible]の[illegible]　[illegible]人

蔵舟於壑蔵山於澤謂之固矣而

夜半有力者負之而走

か[illegible]の[illegible]

[illegible]知大盗乃止

七夕よ[illegible]

銃者夭

[illegible]　桂夕

純者[illegible]

[illegible]の[illegible]　市止

[illegible]

[illegible]　一井

[illegible]

○川○○○○○○○○○○○荊○○ 千由

一休

わろくの○○○○○や月の雲　湍水

法然

嵯峨のつくり○○も○○○○○○　嵐雪

山岩

わくふ穴霊を滅する岩の角　湍水

海石

苔となりし○○○○○○○○○　仝

名所

八○○○○奥○○○○○○○○○○　杜国

あつ〳〵奥の背や武蔵太田山　芳了

辛崎の松は花より朧にて　芭蕉

○○○一把○○○○○○○○○○　湍水

○○○○○○○○○○○○○○○盛　荷兮

隠逸

○○○○○○○○○○○○○○○○　合咕

関○○○○○○○○○○○○○○　○○

○○関○○の○○○○○○の

○○○○○○○○○○○○○や　杜国

○○○○○○○○○○○○○　越人

○○川や○○○○○○○○○○　芭蕉

○○○○○○○○○○○の○　去来

湖の○○○○○○○○○○　○○

弁もなし春柳のおもての名月を　一礫

角田川にて

いさみのわれ秋露の顔合せよ出る　貞室

みよしのゝかゝりは秋も見のつまる　破笠

いざよひもまだ更科の郡かな　芭蕉

名月や杖にあてゝ見る角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらハけふの月もみよ　素堂

[illegible]　旅及

[illegible]　闌支

[illegible]　舟泉

[illegible]　尚白

[illegible]　路通

[illegible]　浪化

[illegible]　凌岱

[illegible]　一笑

[illegible]　湖水

[illegible]　北水

[illegible]　芭蕉

[illegible]　加行

旅

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

大和国平尾村にて

花の陰謡に似たる旅寝かな　仝

端娯里を眠つゝく通りかな　久孤

日の入や舟にゆるくる桃の花　一髪

のどかしや漆か葉のゆきつゝあ　詩竹

いとゆ刈そくうしろに花の[illegible]　甘蕉

あさ人の餅かり

わらく言ば屋松さく笑かな　徐風

雀のゝ似せよ倉日楼ぬ句もさん　金松

咲きこみ投うちは我頭に義旗　昌雲

みしくあや桂国を出ほ亭の[illegible]　稲若

冬こゝにその大みなに一声か楽　傘下

芭蕉翁を送る

[illegible]　[illegible]

なきくらく[illegible]　秋の塚　一井

あまし風にやられてくゝ[illegible]　理丸

あのゝかし似そくし春の[illegible]　舟泉

雲それよするゝ[illegible]　道珎

さゝし[illegible]人[illegible]

宮の綴の月か二人にいまつれかり　蕉

戯人篠きる[illegible]　[illegible]

月ある招彷つ哉を笥のうへ　野水

松ゝしまる松くりを大[illegible]　芭蕉

蝶乃葉の[illegible]ちりから秋の[illegible]　路通

[illegible]

よ松くし[illegible]

待母猫は屋ねをのぼりて秋の山　荷兮
とらへらく梅をもつる影をかさ　京　ちよ
入月は今はもうしとうしのもの外　素秋
後に去りけるを寝る所を外の外　一井
品川まで人をおくりてとゝく　文鱗
蓬萵の墓をたつね杖の先　芭蕉
草枕文も書くかりて夜の露　常秀
旅寝まれね刀くらそうて村しぐれ　荷兮
忰海のらく芭蕉をよみ出て　
めくら婆をもれゆと神のかとくるは
等の見し羽織を緋の入よろり　雅友
其日も暮てわつる畑

めくら婆の夜の外の外の名　荷兮
足袋もくれ人の外の外の　越人
かく庇の事をくれの外　傘下
里人の出てつらうらしの衆　宗因
一ツ越人に吉田の寝覚　芭蕉
宿をかれと二人旅ねともの外き　
蝶の葉しき外の浮世の雑掛　同
逆境
菊の花の抜きくゝりの附
きて月の旅人旅をそこそこ外の地　露道
子をも抱きくゝ田をも寝る外の外　杖宣
金の田の旅人の浮世の外　浅縁

よし野にて

[illegible]　杜国

[illegible]　梅吉

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉

[illegible]　荷兮

きさらぎや[illegible]一[illegible]　同

一本の[illegible]　杏雨

[illegible]　杉風

[illegible]　亀翁

みよし野にて

かくれ家や[illegible]　嵐竹

[illegible]旅枕　旦藁

人のいのちを[illegible]

さればこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

旧里の人にまつ[illegible]

[illegible]小田の[illegible]　杜国

[illegible]遠長[illegible]にまみえて

[illegible]　越人

ある人の[illegible]

[illegible]　荷兮

[illegible]　嵐蘭

榾乃火に籾子見えけり僧かね八　去来

月や遠く耳やちかよるひしの声　西武

あくまでや梅の旅は泣年の暮　芭蕉

さ後くの子ふしぎなりまの暮　除風

　初音寺はなしく茶ろ見えかとろく

引年や親に去らるゝ芥かな　越人

秋

まつの世はひある人の素魚哉　イセ 一有妻

きぬくや余のこともよしも時鳥　除風

鳩鶯鳴く鹿のかまゝる別れ哉　長虹

むしの丁の月に立枕ふらの川哉　文闌

虫ぞ丁に小袖の花くらる母の跡　冬文

きりぎりすめしの姉の娘は花あり　心棘

　いなつま鵜鴨嶽なるかな

霜月の稲妻消えぬ見月の秋　長虹

一声やり人待つ頃はとうぐ哉　尚白

　きぬし　きれよ

つまれしと家ゆかぬ雲霧の花　荷兮

あさがほの落ちる朝つまどの露　小春

妻のなかのあるよれしの月の秋を待つ　越人

松の葉ひ尚白く旅のよかりの代　俊似

物思ひい人縫る明くいつまでも　舟泉

うらつねに虫や雁喰へる別れ哉　嵐義

山坂ゝのゝ恩かりや春ゝ　松芳

きぬくを数へよそく庭のかつ　乙松
朽そろしやきぬくの比油蛍　昌碩
無常
恋教よ
花かるや夜ま雨兼とか泥松と久外　宜武
世上常ニ退
咲川籾の朝ひきさしの魚　傘下
恋教よ　堺
菊哉や宰て寄行や出て　元順
杉坂の深紙との人の弟まかり
だうかの花の花ゆりける
橋のうわり数へ成きかり也　蕉亭

いのちらの旅の荷り
まのうへ止うちしく游る猿ちる　京　去来
わる人子のしるかかる雨中も出て
あらなの　小流とも流るちまち　蕉亭
世も止ま常く恋の弟かりうる比
名月の　桐の一葉と思ふべし　卯水
辞世
むかしかり灌籾下り　宜工齋
ちまをきられうる比
似と数の　わうそ出て一瀬り　蕉粘
一条無うそく
春く雲や山田うかみの見るうへ　錦雪

妻の追善ありし

なき人に見えし其の里人もそれとなし　自晄

まよひ出る影のさまかへりて出るぞ　去来

終に生死やうき世の雨に此ならし

二七日月まつりし侍

その人乃面影さへなし秋のくれ　甚甫

母に別れたる子の哀れを

わかるゝや部屋の内にも秋の暮　尚白

ある人の追善に

埋火も消えや涙の煮る音　甚甚

親にておくれたる人を

[illegible]　嵐蘭

我迎ひ[illegible]余所の月　小春

釈教

伊勢参宮

神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

[illegible]涅槃像　嵐蘭

西行上人の画賛に

まつ白に見ゆるは富士の花のけしき　夢丁

松前しき寺にて

連翹やさかりも白し花ほれたり　胡及

かくて菖蒲の葉のくる二本の花　以芳

木の寂そく捨もあまり雨の一花　杜国

法の花の花ね蓮に開く花かな等　卑松

ともに酒債とる徳ん 嬉さ哉　其角

貞享つちの人 秋の末弥生一日
東照宮の別当供養の出席へ拝賀
宮師逢坐頭の法華八講の結る
ところ〳〵きゝなれた独吟は書つゝそ

岸島のとゝろを

数ゝ花の あの宗はいまあらし　越人

女房の 独吟の那らしに流る露
かれ〳〵嗚き宗旨の銘の成佛の
流よ西ゆく声の由来の経をきゝ
しぬれ衣

ほろ〳〵と落る瀧や 風ひのゝむ　仝

紀書の尾上の 桜 咲つゝり　俊似

吉野や つゝじかつねの 蓋草　一井

八幡宮にて

海士か家 聖よりひとむ 弥生か　千閣（イヨ）

咲よなり 石亀んま 寺の紅牡丹　一井

重ね山や 出陰しの 紅洲 新屋　蕉葉

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉　芭蕉

灌仏の日に生れ清し声つきね　尚白

...にて

縁のあつき 乳飲子の 膝かな　一雪

我よ身く 蕃の日の 清水ろなり　一笑

十如是

おのゝゝの流れて通るゝ宝か　荷ち

即身即佛　一

安陀女三十八ねんの秋　里益

ほとゝぎすひや経の縫ける窓紙　風浮

おとなくや門すてあさく経縫紙　荷ち

おろけの火ゑそりもりのうすしるよ　擬丸

石に蓮に能縁冠のかゝのれか　文里

猩[illegible]より浄土安向すり　無帽

おまゐり居るてあくる雌鳥か　一枚

勝語のゑとらかれそん松の陰　如雲

平等施一切

[illegible]

舟遊く又きれしまり一時雨　嵐蘭

隠家の安国論ちらしく

たうらくの源や直に訪ふらん　我人

古寺の香

曙や伽藍く乃ちらはし　蕉夢

日

雪ホやうつる二三片纔　俊似

つくのそ乱くこぼれませし雪仏　一井

親痛する人のさくりや細つくき　文潤

千観のこゝろ甘へし年のくれ　其角

薬玉品七句

如寒者得火

寒川白根の嵐に川とまるなり　湖及

如裸者得衣

雪の日や海棠　梓人あまの家

如商人得主

双六のおひくよりのたちつゞけり

如子得母

竹もそくあけぼとこまろくまとけり

如渡得船

月乃比漂の　槙木さらまくさけり

如病得醫

うきくさもき　清かつみ寄る出来り

如暗得燈

秋の[illegible]や[illegible]、

神祇

[illegible]や[illegible]　助[illegible]

二月廿[illegible]よ

[illegible]や廿四日の月の梅　蕪[illegible]

[illegible]と梅ちりかゝる[illegible]は

[illegible]こゝよ神の梅　無[illegible]

上下の[illegible]社の梅　昌碧

[illegible]の[illegible]梅の中　[illegible]

[illegible]梅の花　[illegible]

[illegible]社の梅　[illegible]泉

月代も[illegible]梅の香　雨[illegible]

門[illegible]梅の瑞籬[illegible]　宣[illegible]

[illegible]人の[illegible]　[illegible]

[illegible]社[illegible]　[illegible]

[illegible]川[illegible]　李[illegible]

[illegible]の[illegible]中の[illegible]　好葉

[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]　禾学

川[illegible]爐[illegible]　[illegible]

[illegible]や里の子[illegible]　[illegible]白

此月の[illegible]　松若

[illegible]や[illegible]の[illegible]　落梧

菊にこそ生細

いつしかも言もめでし神ぐら　利牛

神の身と成るとは秋の神送り　野水

洗ふ垂川　夜明の鐘の神楽　昌碧

かつらきの　神はいかさま夜ならば　村俊

橋桃や川猿うくる猿のくれ　卜枝

祝

肩付ハいくよよみりねに宮笑し　冬文

幾代乃年の暮まて

鶯書行年経てつかぬるうちな　重五

君が代やみがくことなき玉つばき　越人

青苔ハ何ともなしの沖の石　傘下

いつまでも家の春の上よ松かん　亀翁

萬代の秋にわかれよ白ぎく　舟泉

おさまりかねある人のよろこびは

生ん親へ梅をたん乃まゐらせ　芭蕉

曠野集員外

誰か花をおもはざらん　たれか市中
にありて朝のけしきを見ん　我東
四明の麓にありて　花のとき〳〵をしれ
せんとに隅田川のほとりの山
あさみしくとりておもむきを実にうらやむ　又
麦会し屠と云とりの長
此句尾陽の野水子の作とて芭蕉
翁の伝へしをたよりにきこえけれは
比田野人麻をとらへし実に此句を
感じ出し　あきこみたる人の中
又鹿のおもむきせしはなれたる人

あつて桜をまたあしとかへすへき雅句
あるは野老とかやへて左の友に撰し
〳〵に宗字ある三百のまことをしる
も宝の宗老杜のとくうる意
桜唐の句を見てらいく
宮をかりられ葉〳〵おちたる桜唐なし　素堂
ちの文人のすつかくとはなれ
しを三人閑き発句吟しく
まをさしくさ波宮の…にけるよ　野水
桜の路まをとろよまつの来く　荷兮
あの芭蕉のるれとし　琴かう　越人
門の不月積閑か世をひろ　水

風乃月刹に　初秋の雲　宇
武士乃なきさ川もいと近し　人
あかきにつゝく縦乃阿る書　五
総よう縁にしも芋乃ゑ　宇
津ふと降くれたるはく雨　人
ゑらんて松明とる乃の端　五
手白いとすむ　小山のてら　宇
嬉さかく　一室様も怪強り　人
めてたさも　たつき　夕月　我乃れ　五
露の身へ　涙のせる　楊思ひ　宇
秋をまちまく　淫女の妻　人
消るやく　西も東も　結の夢　五

きかうありける　利根乃川に　宇
気乃日のてろくとしてかき星乃　人
露あふに　心ちと　雨織うちにて　水
ふらくときのふ乃帝の嬉しさ　宇
狐つきとや　人乃　えもらん　人
柏木乃　腑氣の　比乃つらくと　五
さくせくての　ゑみ　関たえつる　宇
月乃影とり　今なり　辻和楪　人
秋よ　あつまり　里の　酒樽　五
東しくれ　出精よ　出る量かけく　宇
うれしくも　志のゝ　花衣の　蒹紀　人
りしとゆる　妹よ　涙とわそろし　五

火箸のはねる音のありやなし　兮

うちむきあふて人の出かゝる　人

まつかぜにうらみもなし池の主より　水

花さかり菜もはや定まらぬ　兮

桜くゞ春ゆる事加減の楽　人

墨をあつめて五月とはほぼつ　水

大根きざみて手にはそのし　兮

遠浅や浪に千鳥の淵しかり　無洞

はるゝの雨と晴れゝれ里　蓼

のゝしりやすきに泊は蒼を繕く　旨

百足の櫛る　葉のさき　たゝり　世

夕月乃雲の白さをうち添え　無泉

あはれさの　葉を摘て行まさをに　鶴書

萩の花あとにとも光て取手伝　年

一鉢を干しく　片も古錦　無洞

さかのきるよすが恋しる豆粕々秋　蓼

示すがた　とおもへ年したゝ東　萬葉

いつくともなくて安くなり海　遠　鶴書

温泉のまつわるの木を咲せらす　無泉

腰しなと道もてつる川の猪　世水

うつうつされしや見る月　蓼

秋風に女車の縣杉とと　無洞

神々そ霧のきく娘婦の法師　鶴書

時ぐれものきえ　こがね花の雲　昌鱗
八重山吹ハちりかゝる　あるし　世木
日のいりてやみ／＼なかなん　嬉しよ　亜泉
丸寝たけよ　出さらしふ与り　魚沼
向ふて　実峰る　ものゝ山の子こそ　蕪亭
振離く人の　若ものゝ庵　昌鱗
逃取よく三里の　加藏はえ行く　調書
声らくつくる　壽ものゝ引く　亜泉
むく都れ　世のひつけし縮を　世水
闇を　書けり　蒔子よ仏とむ　蕪亭
ゆうとこて　日経田の都座し　魚沼
松めひ寒さう　日れもこゝ細流　調書

宿もワさる　さうりの戸の月　昌鱗
ゆくしつ秋の母ゝめくる　きぬ　世水
つまくつるも　松かり縮る蜜の窓　亜泉
あき声かけゝ置き　安房の小湊　魚沼
夏の月や　見えける流の出村で　蕪亭
桶乃ろうふ　女入しまひ　さう　昌鱗
人まゝよ縮みさつこむまかり　調書
つひよろ／＼よふ房ろ　精進　世水
葉しき　雛うき　たるとまるあ　亜泉
柳のうゝの　うさきうの卯　李芳
夕霧の隙ふとうまく　久ゝなん　色文

きつくなき世よそ見ゆる月影　蕉了
秋草乃とても寝る猫臥されれ　松芳
弓ひきこゑる猪お撲とく　舟泉
久ふりもとめ拾ひ作ともち出る　蕉了
あつらく物の中の木のきし　冬文
火乃風乃波のなれを見あきらく　舟泉
傾け冬せつしとうち笑ひつく　松芳
ここをとらへ踏まへして下落ける　冬文
海乃はるよ稲をとらく舟川　蕉了
寒年紙　浮乳も世に見切きき　松芳
たくまるく牧家の縁をまひ出る　舟泉
なくなるのもうち花咲くる花の奥　蕉了

月乃影や萩乃井乃名残　冬文
灯よ足を打くぬつ夏の風　舟泉
数珠ふり手けらく猿島乃之人　松芳
灯ほ辰も入逆よ歌の表ハしく　冬文
十日の兰くの松しきつけく　蕉了
山里の秋かへつしく生錦　松芳
もちおうやく入る母く去りし　舟泉
さうふくしとあつ星落る月の秋　蕉了
馬乃こゑされをするのいそく　冬文
さひしさハ錦井の宿の衣　舟泉
慈ふすへく若菜摘みつつ込め　松芳
つくくと弥生きる乃をまりつく　冬文

朧ふかく提燈のふよむ　蕪子
けしの花とてあれたるまちつゝある　松芳
味噌せる夜との鳴さかし　示泉
茶碗の門きまつけよ菊ふかう　蕪子
冷来しくまわくころまゝ丸ふ秋　冬文
まつの影ふ吹見をるまてあやうく兒　示泉
数ゑんまめかゝる秋の旅ゝち　松芳
きてきしく名瀑布を家るほ秋をぞこるて　冬文
そゝう面ゆき山にの家　蕪子
わかくきつは鶏はなれはあり　荷子
雨のよくろ春ましてくる声の白　雅之

引すそし車に琵琶の夕寒うそ　日
ありきつ新もえのかくかくい　蕪子
身の秋旅の出すまつく　同
一荷のすきひし家の声とけ　野水
初あつしまた甘の宗の婚ある　水
茸雑煮むかしすとよそとらけう　兮
土肥をえしくまのあらよおゝゝ　仝
下判おもとは神そあるくね　水
運路のつゆらうこけく逆へり　仝
方位まかかし恋のうつきさ　兮
代まゆりうて安まつてく謹むて　仝
残一番つま經一節　水

月の影峯の院のそゝろなん　全

茄子のなりにはすりまゐり　兮

天仙蓼ニ冷食あましき書　全

うきうきとうけよ看経の中　水

たくへとゝのりくさ每ちらすなり　全

夕せまりしき御つめく丹れ　兮

狗の母ミ郡ヲ八條殿の式部卿　水

秋のあはれよ昔浄瑠璃　兮

飛んてうまれて今は生き絶え　水

八日の月のすみきえいろあさく　兮

山の雉子松と松とのあはひなる　水

きつきあきまでのくるしさとある　兮

是きよ月や梅のけ牛引駒まゐり　全

さ鼓たゝきて隣のありさまを　ゐ

とろくと漁する小舟の峯越　水

氣ミミの皆さし賀茂まへりける　兮

鬼ふくらはまよひぬ都をさして二年　全

夜をつくさく経を唱ふる念仏者　兮

三日の松かつりに火はとらず　全

借手の寒鷄を捨人ゆきとまる　ゐ

脛くや小姓ありて悲しの花　全

人松のよおもひ住るの川端　米

月きつゝの雨かくきえ事の集まりたる

かりしつきさに摘まうらへ其開けく
宝禅法師か白きすげし出たるあの
秋乃痛とめ今を手傷を書いつきる
自よ摘きさしくうへ今のき 開く
坂乃松うみろり ゐの秋の森
とろくろを涼の是へくとろかん
杉抄ひらけあきつ世に宝の星
暮あ松つ人松さくよりゆ
但の着よ込す まよ 咲くる
あれと主て精のゐを遊る露く
よしつくまつく ゆふくへく
隠てゆくへ 手の白飯を世く 拙ひ

越入 傘下 同 入 同 第 下 同

まくれのうけよ 涼ろく 汲白へ
大野乃人よ涼草をうるされく
原の夕よ陽縄うり川
拾うよ摘まなうへ我を惜し
秋の ひしきの 畑をる あ
ワりまくよいつか此世を出く人き
藤のうくまるゐ涼の出つむ戸
花の松るまうへ人うまつ源落つ
其うりの 耕乃とまるに 春風
うち郡く浦の世を知の彼方の里よ
雨へまいりくにせわかる 犬
蘇きかんのかの所にまさ此手わす

人 同 下 同 入 同 下 同 人 同 下 同

なくしつる酒乃後架知し　人
談合　猫舌　湯治まいりする　日
まこと　献立の　こゝろちらし　下
町手代の　湯とりしく　押かくし　日
白壁　花と生え　きうもしくも　虎　人
ふく風は窓の夕暮のみつくと　日
半ハ日暮　磯　常の　秋　下
おろくと月まる　松の影に似て　日
人の縁すハ　今川　とも知し　人
あきハしく　萩や　菖蒲　花の　辻　下
二世まで妻　のしそろへ　町中　人
松かくと　出法乃　雪の　葦附　て　下
皆　同じ　中　手拭　人
盃はまろき　雨は　花の　雲　下
田楽を　焼て　様淋しき　人

深川の夜

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢箪乃大きさ五石ばかりなり　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
なに事も長安は是名利の地　仝

医のおほきこそ目を見るかりけれ　越人

いそかしく師走の空に立出て　芭蕉

ひとり世話やく寺の跡とり　越人

此里に古き玄番の名をつたへ　芭蕉

足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人

きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　芭蕉

かぜひきたまふ声のうつくし　越人

手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　芭蕉

物いそくさき舟路なりけり　越人

月と花比良の高ねを北にして　芭蕉

雲雀さえづるころの肌ぬき　越人

破れ戸の釘うち付る春の末　仝

はるさめはきらしきこまのひきかへり　蕉

家なくて服紗につゝむ十寺経　人

二の尼のおはひめるおもひは　蕉

人去ていまだ法座の匂ひける　人

初瀬に籠る堂の片隅　蕉

ほとゝぎす嵐のあるゝ六年に　人

垣穂のさゝげ露はこぼれて　蕉

あやにくに髭の頭を又すりか　人

わの雲は色々につくむそ　蕉

此身のうちの恵こそ滑さうに　人

頭も立て鉢よりねぐらり　蕉

秋の日にしかもおとなの出る来　人

さいくみのくさ字岡にゐる　甚
いのちしく鬼麻乃末董や　人
雅き人をとる子の柳のくひあさ　甚
都の比詩ら衣きせうしぬし　人
田ましをうかく腰きこうち　甚

公縞に付侍りかれく来る人の逸つれをさ　甚角

若ら見ゆ花くるの文や天津ア　誠人
三　秋さの月さん雲のかりから　仝
菊萩の宿に見るさ引つりく　角
秋くさうかく笑へ見つまゐる　仝
灯の来まく旅よりけらる衣　仝

歯きあはりときえかりつきのまゐ　人
清きうる湊ゆうくくるにぬまりくく　仝
静まりれ名を雅をすく出る　角
室謡の遊環の松の杉をやしき　仝
おしゑあり入る今ン二万出　人
ゆとおしき子を主從人とも名分ける　仝
かけとうをつくえりしつるきうるよ　角
湯麓さき耳とつきたるきうくえとよ　仝
負つきもつくね月の江の糸　人
そ紅みの窓土六浅せ女よ秋の書　仝
花とさうしうる笑の一観　角
鍔形きくれしき袖よつくさみる　仝

うき世にはつけくるゐ人は扶　人
西至海東方鄰も同じ心は　仝
よしや鸚鵡の声のうしろさき　角
あらきおや戸にたきまする夜の雲　仝
蕣の親ともなく秋しらのまん　人
世を猿ひ病めし猫しれさうち雨く　仝
菓つく言ふ人師走白のかり　角
夕霧宿乃とまりて桜のさい　仝
いくつの笠を荷ふ強力　人
宛りちらゝ鼈うちならひ笛就　仝
ひゐなうきうつく伊勢の八能　角
満月にふ愛しさのうを通りくや　仝

念者法師は秋のあきき世　人
夕まくれまくらうちさき髪さ並蓋　仝
弓すゑひなる実あけのまま　角
花まくらにたる倉の鐘守頃由ひく　仝
さらのきてまうぬ馬士の開さう　人
花の香にあきらつき膝をさうや　仝
むしろ笑へまき寅續乃妻　仝

素もうし彩路人の禪やさき　嵐雪
秋うそさうしいつも湯猿　越人
月の君書を引ちる飛弁よれそ　仝
冬面菜の笑ちさけるより　考

すゝねあひく治ゑ出うつらぬ里なる　仝

川越ゑまゝて娘下のこち　人

痴夜ゝ包の遭とおとへ蟲の聲　仝

帽子ふきつて声かそり出る　雪

身こさとみるそすれのうる雲よ　日

涙をひよえとりぬきゑ身さき　越

ふ紙よりも池あけする如き紅　人

引継すうさく久たる浪人　嵐

菜物を濡ようそとつり脱　雪

喰日ハ拵そうる雪の月影　越

志ゝ雪の雑を洗ひ家女　人

つまゝゐの医者有り隠居也　雪

ちる花よ見かられとも出然　越

よふぬとなるとへ ねまりつゝん　人

和らるやとちつしのひらる相の本よ　冊水

日のうしうきとまとの郷紀　梧

山川や精の喰我きうにん　仝

紙を遠うつひえるえうり ふゑ　雪

松每よきうぬ 押合月よ菓物ほ　日

あうさくし 芋穂の萩　梧

川越の歩よきうれなり 秋の雨　水

ねふとく痛くる 影の書てらおき　梧

りく世とそりへまるくうゑハ 梅の下　水

すかしきる人はかりきれとも　桔
宿る夜の湯へはやくと膳て　水
ともし火消て衣紋の帯　桔
岩の方雲あらしみあふ嶺越る　水
旅寝するうちの人数細くさ　桔
京へ出る母のふまるゝま一文は　水
木戸八幡いく月の光かさ　桔
耳や鳴やよそても花の散るを待　水
日よ見を先きに世すみの初午　日
いつやらも営誉はね此花くに　桔
山伏修く人嵩くるなかり　水
ふかく／＼とさいなける筆　桔

桃柳うしく紀國まさし　水
紛る手と深き絹を振袖なれは　桔
あつく拂ものつゐねつ豆腐まき　水
まつしきりやつる名まゝさきの世を　桔
うくる厨仲しき能程ろまゝり　水
雨毎そく雲のあまつて酒ゆや　桔
柳ちえくそ御しめの遊あそ　水
新なく月とそまてられぬ千鳥　日
寂しき秋を象支居りなり　桔
たまの上手は見きそろ歌くし　水
茶のゝなたみいい人の酒　丘
紙とめの千奥姑るさ川　桔

降よりも動き出す人すくなかり　同

まち中のこゝろ涼しく手をよせし　水

さらりと人に雲雀腰かけり　揖

一里の岩越えりのゆく鎗　一井

うきまひの生の雛孫参らす　鼠弾

さまきてさや茶を引て疲れたるらん　胡及

肩衣着つれ帰るよみ人　長虹

夕月の入きそ早き姥さへ　鼠弾

なからよ鰤をつるしらむ秋　一井

里深く踊あかる二三日　長虹

定月もまよひられられく　胡及

間の柱に帰るあのふくらき　一井

着物にきく物にく女　鼠弾

うちしとかせ絹のこし陽を見る　胡及

吉く早く表来の越の雲郷　安那

なれつのよそめあちハうち参る　鼠弾

詮ようく三日女中たより　一井

浦風に腰伏せる月夜し　長虹

みれはかしとき紀伊の魂屋　胡及

もの着のさし矢射けるなの庭　一井

蒜ろくに香り遠ざかりなり　荒緑

まるのられあつきくを膳ろん　胡及

残りの絵の旅にたく　長虹

すゝみ〳〵すゝる閑もなく日の暮　嵐蝉
雁金がなくある放生会の鐘なり　一井
本そなへまちあかるまた松の枝　芳江
稗くふうかる人〳〵の奥　胡及
呑年に巻りつぐ金の綴あつき　一井
酒のみも世にはよつ不挨人居　嵐蝉
薯やく蕎麦の後のうそ嘘もなき　胡及
こまたる母なよあかむ花嫁のまく　芳江
侍のる瀬入定の前のきうなくなよ　嵐蝉
哀行つみる人の咲壽　一井
毒すくく瓜一きれも喰ねく　芳江
片風あちくゐる也く　胡及

桜あつまりて蝶うなき庭の月　一井
君ねのねかける集まき唐丸　嵐蝉
ぬくもし月夜の君なれ松白雲　芳江
又かゝるをまなるかへるのつくし〳〵　胡及

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉乃軒に行
かよひ瓦乃窓をひらき心の泉をくミしりて十あまりなゝ
乃文字の跡風をまなびけるにあへる事や宗匠のをしへよく
よせる秋冬の二三子序に頼みて火桶かし炭といふこん
菴をこれ宗に此日とげ宋人の手を亀らずといへる草
あらしと見のわら筆に墨のさしやかる紙を竪き様に
書して今度乃雲の去るさまに我と去りかたらひ
いつる老翁乃こゝろの耳に入らくもくるゝのふ庵さる乃ゆ
ともの見に擬のすり乃あまたへかれどもいひて炭の日
乃ゝと出よう秋乃月ニ入しらかさ帰けれや炭俵
篇ありて書冬はあつちの二十ちかくりとも人見とある

きゝくすゝみ発句乃経を中おちてわれ文くゝなき炭
の節みへてかくし題号をかく猪ゆるきか八
詩乃正統よりへる五ゆ乃老子ゆる八篝の老く乃み
ゝひる八ゆかゝねと剣乃に似せる予おく以緯より
ゆありつるのゐしひし白居易猿ゆ乃下達ノ
やりたる身と郷て再至乃処と炭乃ゆ以来乃葉の
るまつ及る乃かくり乃秋さく大桶乃かしいたよかぬき
炭の始まるをそくちむかえるうる炭俵ゆとゆる
八郷せくとおいてらるべ小子炭竈てうし和ぬ
とるまやさ四季ふうくを見し妓婦と歌ろこのふりて室う
序まてさと去秋てゆくれぬぬやうけるとうる今甚だ勧と
ねりふぬ題号をのつりく男りさぁニ夜をつくる法八

あらしうしとくちをとぢむ

元禄七乃年夏閏さつき初三乃日　素龍書

むめがゝにのつと日の出る山路かな　芭蕉

処々に雉子乃啼たつ　野坡

家普請を春のてすきにとり付て　仝

上乃たよりにあがる米乃直　芭蕉

宵乃内ばらばらとせし月の雲　仝

藪越はなすあきのさびしき　野坡

御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡

娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡

ことしは雨乃ふらぬ六月　芭蕉

預けたるみそとりにやる向河岸　野坡

ひたといひ出すお袋乃事　芭蕉

終宵尼の持病を押へける　野坡

こんにやくばかりのこる名月　芭蕉

はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡

露を相手に居合ひとぬき　芭蕉

町衆乃つらりと酔て花乃陰　野坡

門で押るゝ壬生乃念仏　芭蕉

東風風に糞乃いきれを吹まはし　仝

たゞ居るまゝに肱わづらふ　野坡

江戸乃左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方々に十夜乃内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印乃湯治を送る花ざかり　芭蕉
なハ手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはま乃雑炊　芭蕉
千どり啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進乃高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風の陰にみゆるくはし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道ハ春の小坂のかたまりて　野坡
外をざらりと囲ふ相撲場　嵐雪
細〳〵と朔日ころの宵乃月　利牛
早稲も糯米おなし出来　野坡

ウ 泥染を長き流にのばすなる人　嵐雪
あちこちすれば昼まへなるころ　利牛
隣から節々嫁を伴ふ候　野坡
てうくしくも祭るこのわろ　嵐雪
恩谷の九ちハ異様な護地　利牛
五百のうけを二夜にえくう　野坡
網ぬきれいずくの経ある妻の人　嵐雪
人のさりしぬ雲遠になるかり　利牛
新役の難を下せん見うられて　野坡
銀米中ある芋をとる月　嵐雪
澂と雨降やみて秋の風　利牛
雛巡みて八又 鮓ろく　野坡

名 あすこのかるしなる影に翠ぬりて　嵐雪
抱揚る子の小役をとらる　利牛
くらりくとは内の著指たる拙　野坡
心みるかし箸のせん無く　嵐雪
婿のまさく娘の世をわひる　利牛
ことしの名れハ何も儀りぬ　野坡
垂佛の御ゑ法多くとぞすらん　嵐雪
汁らいわいの小屋こふくする　利牛
泰の穂ハ秋つる風に吹倒ま　野坡
る場の壇銀のほふすさ有　嵐雪
声ハろうくはろて人に寄る　利牛
今年夜や寒くちらほらくれ　野坡

ウ
賣手もうつて只さへ給ふ大江　孤屋
日ゝくと山まゆのふり出し　利牛
隠名乃役きめらるゝ　野坡
うしろまへの浅黄の細引　孤屋
雅ある母をすゝめ茶乃給　利牛
まきらひ残る卯月の鰯　野坡

ふか川にまかりて

空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋
昼乃水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨ふりて　岱水
そつとのぞけば酒の最中　利牛
寝処に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀乃ころぶ秋風　孤屋
きりぎりす薪(マキ)乃下より鳴出して　利牛
晩の仕事乃工夫するなり　岱水
妹をよい処からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛
鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて売出す　孤屋
この春八どうやら花の静なる　利牛
かれし柳を今に惜みて　岱水

雪乃跡吹はがしたる朧月　孤屋

ふとん丸けてものおもひゐる　芭蕉

不届な隣と中のわるうなり　岱水

はつち坊主を上へあがらし　利牛

泣事のひそかに出来し浅ぢふに　芭蕉

置わすれたるかはを取にやる　孤屋

名

菜のやうにまるんでぬれ紙子　利牛

宗匠を送りて帰る船其屋　岱水

今のやうに雨戸の石をさしてゐる　孤屋

年貢すんだとほめられにけり　芭蕉

息災で祖父のしらがのめでたさよ　岱水

堪忍ならぬ七夕の照り　利牛

名月のまに合せ度芋畑　芭蕉

くゝりのせて蓼よき鮎　孤屋

ウ

このころは宿の通りもうすさむく　利牛

山の根際の雪かくれなき　岱水

よこ雲にそよく風の吹出す　孤屋

晒の上にひばり囀る　利牛

花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉

余のくさゝなしに菫たんぽゝ　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛

各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛
岸のいばらの真白に咲く　野坡
雨あがり珠数懸鳩の鳴出して　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿作り菜気乃紬たゝみもせ　野坡
こゝら鞍れてわかく人あまた　孤屋
薦乃月干菜ぶき茄汁わろくさし　利牛
掃もゆくのゝ檀ちるらし　野坡
ウ
ちゞみめき代井てから出けりほあつ　孤屋
坊らは子あれてやそらの仁平次　利牛
松坂や矢川へ入らも越て通り　野坡
呼立し隣もつゝき関乃表　孤屋

十二三弁の衣裳のおそろひ　利牛
本堂はしまるまへとろゝく　野坡
何のあつる方八あつるむ作の色　孤屋
只青羅をうよはすくゝる　利牛
通て紙姥のうとくの網をひのかく　野坡
天気凡の桐よきは舟の鰹　孤屋
生ゆらる菜は新むひと漬　利牛
梅の実落る屋根くるゝく　野坡
学堂の臍の連立出あゝる　孤屋
頃殺生てゝの人のそろへく　利牛
わかしさ二つる良のいかめ出　野坡
ほめくの絞よこわめく　孤屋

なれ稗をこ川くえ渡るを掛ゐは　利牛
奔拐の気もまとつくらぬ縁　野坡
晴くは西風武者の鞍のつけは　孤屋
尚きのへよりつ今日は大旱　利牛
切蜷の喰絵しける樽くろを　野坡
くそり納豆を仕込む慶の道　孤屋
攄日をすきつらくをとも詰とくる　利牛
落くすけゐる下積の雫もよれ　野坡
つまそあれの名をいかしるかまで　孤屋
とゐりの妻の まきき井の本　利牛
くまの身様よ面まある古柱　野坡
すいきのものあやまるところてん　孤屋

ひつそりと多くは家ゐる浄土寺　利牛
戸てくるみし水風呂のやね　野坡
代通を捌く梅のすれわひく　孤屋
京ハ小宮ハわくらしき内　利牛
院まらは宮の男の袷をかくえ　野坡
餅をば比丘尼の綱の寒くとよ　孤屋
鮮橋の旬を年く世へそえて　利牛
天満の牀を又かすれくの　野坡
屋ゐ神主をくてよひつそる船の者　孤屋
ひくし鉄るしく気ある錠ある　利牛
燃えさる蕪をあれ勝るへを　野坡
十日は麦のふりまわしする　孤屋

月花にかきあけ城の跡ばかり　利牛
弦上颪海雲とりの桶　孤屋
機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡
小屋のこゝろの寺静なり　利牛
堀端に晴るゝ星を掛出して　孤屋
濱の積かけをこぼしてつんなる　野坡
麦畑の替地に流る清水坑　利牛
恵くずも志ある町新畝の宇　孤屋
抽西も子持になすれ只たくさき　野坡
又此霜の古衣いくつく　利牛
妓王らのうく上あそ二条にそ　孤屋
ゑふハゑんかく寐しかたき　野坡

萬葉乃てまえハ神るを放出し　利牛
一つくなつりに饅乃雲描　孤屋
婦行に蔬りちぎる野乃肉　野坡
なよめすゝまゞる書乃眼あたれ　利牛
めを鎮く無理に嬉のす懸の数　孤屋
又たのみして家洗たなりをく　野坡
かくさぬ世中の芒此白をまつるこ　利牛
入来る人に味噌豆をかれ　孤屋
まちうちに赤除路乃針川　野坡
此藁屋乃みゆる宿乃ゑんき　利牛
打和しくゝてんとほくゝ大雪まされ　孤屋
ゑふ葉に餘りしる無汁　野坡

家乃門引越て来る桜糸　利牛

風流にひる迄しつかよく　孤屋

あちらこちらそく畑乃百乃巻　野坡

入舟やいさく内乃六月　利牛

村迄くお上の家居ひろける　孤屋

出るとつめる組うらうこのひ　野坡

ナヲ

大あ乃あれくに畑乃ものけて　利牛

何年芸掩しを安杉乃木　孤屋

讃みにて弓同心乃ありさと雑　野坡

九九十月湿をわりらふ　利牛

抜中おそくさそにめつくし　孤屋

定やし某女望よう借て悪る　野坡

里離れ形抜引乃ゆきつまく　利牛

やたらへかりのと旅の襟かりし　孤屋

まかうる納戸志年の秋て進者　野坡

うんち果よる八そみ宿く　利牛

丁寧よ仙甚儀乃口かより　孤屋

衍江ら涌きて土よよある筋　野坡

久角よ蹊希の名字と笑くり　利牛

色て戻る鰍乃やきしりの　孤屋

名山

宮先を今年丸風子紙かて　野坡

もえや仕事もたらぬ押えく　利牛

暑廣め林五角とるさうり　孤屋

幾角ふりそてゆる妄て、　野坡

撫もさぬ淡路島のくせの春ぞ見し　利牛

門建ちる町の桐はだく　孤屋

彼岸ぞてきの花の咲ておく　野坡

三人なからうおもしろき春　桃隣

春之部　發句

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　芭蕉

東雲やまんしゝ戸をつれのきり松　濁子

みちのくのけふ関越ん箱の海老　杉風

京
まゝや狭に丹波使来て囃して　去来

膳所
刀さしを借てもつきさしを春の春　正秀

大坂
いそがしき春を雀のかきばかま　酒堂

除つくしや木の芽のにほひの梅の花　岱水

猿いきられ門院婚らの参詣は　沾圃

同しても中の詞や年の宜　孤屋

初日影親家たまもつまれそや　利牛

若松の親の名をとく継る比なれ　野坡

梅

梅一本つまく葉の塗うる　露沾

むめ咲や臼の杵木のよきひろう　曲翠

むめがゝの社に立まるそ朝日影　支考

窓のうちから見ゐしとて

伊賀
むめちるや糸の光の月の白ひ　土芳

梅咲て湯殿の崩れ直しけり　利牛

赤みその口を明けりけふの花　游刀

みるくよ咲そろはねど梅の花　野坡

紅梅は娘すまする妻戸哉　杉風

此あとゝもの七くさ(?)をはやして

とらえ忘るゝも都は負てる(?)蘇(?)かれ　其角

七草や猴(?)ひきかけて切刻み　野坡

うちむれて若菜摘せに膝か(?)申し　仙杖

涅(?)よりの文のかへりよ

睦月一皃(?)つゝもりつまりけり　太来

大そらや蝶の出まはる睦月　傍 文草

おかしろの月まくさきれぬ涅槃かな(?)　仙花

淀川乃ほとり(?)

去年きや是(?)の縫(?)つゝも三ヶ一　利牛

十五日立や睦月の古手売　大泉(?)久左

猫乃恋初手から鳴て哀也　野坡

ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うぐひすにほうゝと息する朝かな　嵐雪

鶯子業をしくん都(?)め文(?)　孤角(?)

うくひすの音に起行雀かな　桃隣

うくひすや門はたまく豆腐売　野坡

鶯乃一声も念を入にけり　利牛

柳

こねりさをつらせて植し柳かな　似夫

清くよし月のちひろし柳かな　素龍

又人にかけられて居る柳かな　野坡

せきれいの尾八つ付さる柳かな　一風

町なかへ人去て宿の柳かな　利牛

傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

咲てより籬にちり込椿かな　孤屋

枝長く伐られぬ家の椿かな　湖春

念入て冬からつぼむ椿かな　曲翠

濡れからきゝみせよく茶つばき　嵐雪

鳥の音も絶て家陰の赤椿　支考

ちるさき柳ほそくらく植移り　野坡

花

うへのゝ花見にまかり侍りしに
幕さはぎものゝ音小うたの声さま〴〵
なりけるかたはらの松かげをたのみて

四つごきのそろはぬ花見心哉　芭蕉

めづらしや内へも花見のさそひより　杉風

うかうかと来ては花見の留守居かな　丈艸

何かしのかうの屋の花見に行て

中下もそれ相応の花見かな　素龍

花ちるや向きうしろを定かねせ　玄来

朝めしの湯を所望や庭の花　孤屋

あすはやと云花ぐもりの宵のくもりかな　荊口

たち出ても梅のとくいきる花見かな　斜嶺

梅の露風吹中より花の中　北枝

牡丹さく人のやどや花のさかり　湖春

あかつきや花の飛のきさかな　其角

花はよも毛虫となる也　嵐雪

山まつりちるや小川の水車　大津尼 智月

花咲も雲のかゝる花見かな　大坂 之道

降雨や花に蝶の葉ちるかな　沾圃

山桜小川飛こす女かな　越前福井 普全

昼ねぶりや花に来のつく鳫金　利牛

おちつきは魚や十日の桜かな　仝

わか気る桜くらべや遠所　孤屋

ちるまでおそ咲月のねぶりかな　野坡

今日の時つまりや出かはり　仝

上巳

堂まへの川のながれて潮干かな　沾徳

道ばたの家やひなの桜かな　桃隣

ちるときの花はいつれそ桃の雛　其角

男の子は雛をみるもひとりかな　如行

月代を見て来し桃の桜かな　野坡

麻の種毎年拾ふ桃の花　利牛

藪垣や雛の見ぐるしの花　孤屋

青柳の泥にしだるゝ潮干かな　芭蕉

隣つれて會すとむ小わかゆに　ゐ有
まくら也や蜂の巣つゝふ屋ねの湯　芭蕉
若竹るつゝしの葉末や二三本　子珊
わそくとこみ焼門のつゝしかに　怒誰
ゑるの行母けのく隠や風の末　篠雖
三味わよき幸の麦の嵐かな　仙華

旅行ふゝく

法度坊の蟻より肉へすゝれかに　野坡

江葉いまくさ寄る氏孤屋旅立
る　ありける庵まてみ送りて

雲雀とこすてりもおもしろ　野坡
桶さへて身まり以見たり　利牛

夏部之発句

首夏

堪へと乃裏ほと見衣かへ　岱雲
衣このへ十日もすぎえ出たち　北坡
緑そ也めく旅ねハせり衣更　九花
来よりやほさき染やかへ　三竜
栄のおとけされほとの薄りや　子珊
扇屋の隣ゐ戻日し衣かへ　利牛

うの花

卯花やくきゝ柱の根でし　芭蕉
うの花乃絶るたくに閑の門　素来

旅行千

うの花に芦毛乃馬の夜明哉　許六
卯の花や根あかりかつらみ　支考
　　照しらん
杜の歌さやうら涼しかきつはた　湖春
雛紙地に蓮あるたゝみ哉　素堂
うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

宵やみは二階にねらるゝほとゝきす　桃隣
ほとゝきす一二の橋の夜明哉　其角
行燈と月夜にあはせんほとゝきす　嵐雪
挑灯の空に詮なしほとゝきす　杉風
木かくれて茶摘も聞や　郭公　芭蕉

まつ宵や舟まちかねる子規　素堂
時鳥啼〳〵風が雨になる　利牛
子規藪のおされぬ捨子哉　野坡

麦

柳ちらす麦焼いやしや飛脚　その荊口
麦の穂と力につかむや箭根山　千川
麦秋の田植や生えた蛍とぶ　許六
　公家乃稜りを川さらさらと送りて
刈てみし麦乃白さや宿の門　和年
　おなし時分
麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡
　おなしところにて

浦風やむらつる幟乃くずれぎは　仙水

端午

五月雨や傘に付たる小人形　其角

さゝ粽くみてやはつも此の色　大坂 洒堂

五月よりくさすみのあちあかみ　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みどりやさ肴乃骨を曽奈?　仙花

帷子のあさきぬき捨る袷かな　素龍

夏羽織

並松とみてのちて町のはつきかな　臥高

桔梗より置白あかし花やあめ　鋳山

二三番離さはゝそもあつきかな　長崎 暮町

ふじ山乃力及ぬあつさかな　猿雖

すゞしさや花さかぬ家の白ひ

此句は嵯峨田より大津ゟ　芭蕉

五月雨

はきはれやしゝ鉢の金丸太橋　去来

五月雨の尾やしゝ川大和川　桃隣

よみくれに鰯ふさきる雨かな　野坡

五月雨や蓑の袂くゝる薊萩　嵐蘭

このうたは桃隣よりきこえし

五月雨や龍もおちぬものかな　依々

涼

川中の根木によする涼かな　芭蕉

けうとさハ鶯も栖や雲の峯　諸甫

一枝にすゞみふ竹のかくれ家ハ　仙化

竹の子や児の歯ぐきのうつくしき　嵐雪

さる寺へ人僕を遣はしむるとて
戒めのひとこと遣はしむるにある人に
それとなくあらきはかりもと
名あるかたへと申遣しける

ふれそ汗をかきかき
陰ゝ路ゝ[illegible]あつくあつさ哉　利牛

ある人の別業にて舟遊の節
て跡とて[illegible]外のことを[illegible]て
ほく[illegible]みのや[illegible]　野坡

穐之部

秋のものハ名月よりはしめて名月にて[illegible]

名月

名月やうつむいても居ぬ我に上るさ　湘夫

名月や[illegible]　玄来

[illegible]名月[illegible]　荷兮

名月や[illegible]の鴫　洒堂

[illegible]や[illegible]　里東

[illegible]の月　利牛

[illegible]の月　其角

むさしの仲秋の月ちゝあひて[illegible]

望峯ノ不盡筑波を

晴月や不二つくばとする町　素龍

七夕

笹の葉に枝付てやりし女人　其角

星合を見え立宿やかやの縁　孤屋

七夕のやふりかくる天の川　嵐雪

盂蘭盆

とうきつくのよろこふ人形や我まつり　洒堂

踊る人さへとふ遊て去年の月　李由

盆の月ねぬ人もとに門をさしけり　丹波

朝白

閑関

朝白や昼ハ錠おろす門の垣　芭蕉

朝白や日傭出て行跡の垣　利合

行春と鰹まつ江の柳哉　游春

秋虫

まよふ音は其夜のきりぎりす　大津 智月

梅のよ人のときゝれやきりきりす　丈艸

蟷螂の手をかへて行露のとも　野有

とうろうや露着て追ふる稲の上　孤屋

鹿

なく鹿の晴を見て入る山路哉　車来

人のうけとる鹿の音や　

鹿の音に旅行の供や袷哉　土鈍

迫に鹿やすかはふ鹿の声　土芳

草花

宮城野の萩や更科の秋の花　桃隣

花すゝきさらし人ちらしや村すゝき　壯重

淀鳥の萩や刈れる稲の端　猿雖

芦乃脇や鳥揺る蓑ちらる
　あそよま津まる　丈艸

芦の穂に着る川うらや茶の糟　去来

山中の茸狩をみて
茸狩や鼻の先なる哥かるた　其角

園菊

菊畑おくある霧のくもりけり　杉風

鉢菊もなかは残れし九日の影　桃隣

秋挿拙

柿のある本どこまでもの野わけかな　利牛

落雲や谷にあかりて蟹の甲　諦甫

秋風や茄子乃枝のあらはれて　木白

笛ふき手もち寝ふかくるふ稀の桃　孤屋

ひきうらしの名に菊畠くらしよひくるは
かれは海南ばんつきひさしはりゆくや
未半あらつき天のそきうらへ八百万
あくいつくへをあかさちところのかるべき乃
ゆくあそひく行けるなきへしら菊
　　やさし
くる五斗月ハ悩み山村乃あそみあれハ
天満宮のさかりく恨むへきるはあるを

奮ひたるや石甚はの世らぬく竹杖
のそしのこゝにある六上て杖仕舍とも札ハ
すりてものされそとあけのつくてきちるれて
さなそられ二階のつま梅打し のひ合すと
このちなと毛やさくみて作るを雄出の
そろ多きあひそーハーあかくおりかほ奈ハ
二らけつり錢のかちちなくりしつれ
てのん本梢の早とろてせみなかおしあり
杏妻葉のしきるにと九出されおぐハ
度と亘殺の比紅葉乃色をみまゝるを
峯岳の頂上をせりろくハつくおるく
少毎りての傍きりみちのれよのへ

小舟みてこゝに一あくられてなんちらのきたくと
ひろみのりしを西らせしちにりと六
やしおら丞きみもあらむ寄しいまぐの
人くお此森をとさらられそうおく発をも
ともむへられらしきのもみまくりなと
小舟をきらのよ

石甚を結ふり根ときや岸みし　卅坡
　夏しられ
お稚取舟しぬや秋のりまのき　岸花
ゑ風名れ乃や楽字寺の路　丈草
礁ひしりよき陰桃乃白ひ名れ　酒堂
秋のられいよく舟のる身代　為守

蕣や荒草も咲は咲し也　利合

夕顔乃汁八秋しる夜ふけかな　支考

くろ秋を風もひろてあるうくり　十枝

秋風に蝶やあさき池の上　信 依々

庖丁乃片袖くらし月乃雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落て初冬の風　桃隣

百枯乃磯ふちる人やまつらん　芭蕉

榾焚や箒従よりも冬うまく　支梁

蛛の巣乃きれぬる冬や小松原　斜嶺

刈萱も淋のちぢみ哉　胡実

凩の木の葉のすそ小家哉　琢香

初霜や猫乃毛も立寝所（みかき）　蒼舟

凩や髭ふけき猫乃顔　八又来

あらぬ山に諺ゝ

木枯に根をとられ付桜哉　桃隣

鶯の聲乃菰乃…さむさ哉　游刀

時雨

芋食乃猿へらしい初時雨　荊口

見くり沖の時雨もみろく　李由

芭蕉翁をめぐの…

もし…時雨…の庵　斜根

土佐ゟわたる舟くらし大根哉　許六
振ねのくゝろ
小松原ふりの細き秋すゝみ　北枝
大根引ふんでゆき
鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉
沖鳥をしたひくの花で大根引　北枝
神送り菜ふる雨の大大根　嵐雪
はむさ冬木の本の哉すそ
人参の手ぬぐひをかぶるさむさ哉　北枝
このれをは挨拶もはむさて哉　示蜂
菖蒲切り吸物ありさむさ哉　利牛

冬されもおもひて冬しみゝ月　我眉
負底や蒸さち上て冬乃月　里東
太のニ白白ふる川の底くゝをつれは
地国方の池のくしゝよまくゝ冬哉
冬かまゝ出し哉

雪

きつまふとあつさと数て降りけり　北枝
初雪の見へぬやまの鼻くゝら　利牛
さつ川るや嫦の崩さの苦けゝ　買山
雪の日よ庵の僧くそ　駱薺　俊之
雪乃月やうけやゝ月うつ手把　椿雅
冬の夜鉢の手をさぐく

杉の木のしく夜の錦　文考

朱北鞍や仮世へかゝるの紅葉　小栽

そらかなやまくる波のくもり哉　琴六

岸に盛え此篠耶さゝらちる哉　此文

海山の道を隔つるもや霞かな　乙州

江の舟や曲突にふさからき煙かな　去我

歌かるた

かうしされ猶ふる迄枯野かな　江口九

気しら雪や杉樅のゆきの白の端　芭蕉

禅門乃笋ほや袈裟ものは十夜かな　坏六

川やし枝の盆ありあかれ村しくれ　智月

白は奥のさかりさ白ひや杉の笛　之道

榾の火やあかつき方の五六人　丈甲

庚申やこよひ火燵のあかる也　杉香

雑々の絵にすんてる神楽　甚角

海へ降る霰や雲に波の音　公

するたつき

蝶をさそ己か棚つる大工かな　芭蕉

雉子の揺せかしまくへの代かれ　万平

餅つきや元服さしる家鏡哉　丹波

山卧のみくるのよ出立旅立し　尚書

侍るさよ氷にまし降ちかなき　智月

定家卿

このくれをえらうとしはし半　杉風

すゝみつきしぬ乗人も夕月夜　李由
あしうせく鶯一羽としの暮　都月
縮みさのけむくしさゝ年の暮　孤屋
そしの坂に庭もちらる俵かれ　猿雖
手のうれしふてさき踏はひ　野坡
芭蕉このみのかれ乃す
いそたしく立てほとるゝる
爪くるく心やさしや年とすり　木節
行年よ身ぺふくむ米ひとつ　淑英

誹諧秋之部

秋乃空尾上の杉に離れたり　其角
おくれて一羽海わたる鷹　孤屋
朝寒に日傭揃る貝吹て　仝
内の隠ろくに藤乃門　其角
拙ようりの火桶も藤をかきそ　仝
つゝひ殘中の先をくらへたる　孤屋
下京をうち語乃薑起されて　仝
坊主乃名をとる甚八おうしむ　其角
よき旅おもしろくして痩るはやり　孤屋
東吹うへさて霍乱の針　其角
田乃畔よ子晝把く投てる蛍　孤屋
あさ有のくちき御編る乃坊　其角

竹蛇乃引出しさんざんしき秋　孤屋

新しき挑灯くらくて ね乃内　甚角

注連縄に鮭のさかればひのかし　孤屋

暦北斗に浅ましく　甚角

豊かく乃排律 桂乃花のまち　孤屋

むかしの子あり ものそぞろ　甚角

いさんに染まりき今はつかひ屋　全

ゑの鍋のあたらしき内　孤屋

はや年もたくさし我ぞかり　甚角

あづさとのべえ小倅のやうすれ　孤屋

手あて寒き耕の積も岩ちりて　甚角

菅とききあらしの風ききまり　孤屋

暮くれて二のれ然るの事とかり　甚角

枡ともしの行灯つる籠　孤屋

茅倚へ雀のくゝる秋乃それ　甚角

小より冷えれ月乃雲行き　孤屋

紙帽しく弱く来かり風の残　甚角

上塗手ましに徒くおく碍　孤屋

又小栗 懐む行言ナ世て表あり　甚角

冬かも色しらく添 茶のらね　孤屋

孤屋旅立する時 客(?)くの行くをみるに

冬ゆる来浮かしく吟行くる

甚角　孤屋　各十八句

元禄戌九月

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣
どんどと水の落る秋風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　桃隣
銅壺よりなまぬる湯を汲んでつかふ也　野坡
つゞけさまなる雨のつらやむ　利牛
風の吹うらにあらし見そめたる　桃隣
近くに居れど長持を手にまたぬ　野坡
まのよくに奉行の松は其まゝし　利牛
いつよりうれしい十月のおくら　桃隣
素麺をこのは藤の葉にきらへて　野坡

うつくしき娵の仕合　利牛
そんなりと西で淀まる川もなし　桃隣
蘇鉄をのけりりる夕内　野坡
附まつと仏きこゆる鷹の門　利牛
鴫やつ鳴まきくもあらず鳴し　桃隣
人のお頼つ柿を楽みに渡される　野坡
もそや淀をも十日ある筈　利牛
より平北棧にゆ稲つくろひて　桃隣
むくひの乃ちこしくれもつれあれ　野坡
笠紐にあらしく身形てすかし　利牛
ゆるりしきゝ燕そへつく　桃隣
此谷の茸きゝし秋の暮　野坡

杉の木すり月ハうそくらし　利牛
けしかり老の身乃あくまくて　桃隣
中ちきれめく又藪医ハ待　野坡
よいやうに承はとれを献て居る　利牛
去やうしんしられてあためる商　桃隣
帷子も二肩ゆくらぬ暑着して　野坡
京を離別、家に奈入　利牛
名
嫁娶に祝会する富田(トン)錦　桃隣
隣をめらんて今るも持てる　野坡
飯なく卯を雪鮨よくせする事て　利牛
先沖まてはみゆる入舟　桃隣
内てより葺の手にても茶の陰　利牛

ち川とも風のむかぬまちさき　野坡

神無月廿日ふか川にて即興

振賣の雁あハれ也ゑびす講　芭蕉
降てハやすミ時雨する軒　野坡
番匠か樫乃小節を引かねて　孤屋
片はけ山に月をみるかな　利牛
好物乃餅を絶さぬあきの風　野坡
割木乃安き国乃露霜　芭蕉
網乃者近つき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えす　二十八日　孤屋
ひだるきは殊軍乃大事なり　芭蕉

淡兎乃雪り新傍もちぬ　野坡
内立つむ鍬桃折を吹けして　孤屋
疱瘡するる湯屋の膏薬　利牛
上さきの干菜刻むもうハの手　野坡
名は出しぬ身を内で立ず　芭蕉
絹売のちつはつのなをつかく　利牛
娵入の門もる西千石丸　孤屋
此竹の縁悪もなきを指有に絶　芭蕉
衣よ膠のうつる土草　野坡
刻留の巣にも思らく露の上　孤屋
吹まゝうけるな業くりつくまけ　利牛
門職の常しのあをあかるる　野坡

平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ喜ぶ　野坡
さゝくさと大晦日もくれめくる　孤屋
せゝる年れてのむ状の跡さき　利牛
井よくて儀業会の借かゝぬ　野坡
望をくみさゝく経せぬみ内　芭蕉
鳳のやうく秋の路の戻さくり　利牛
鯉の鳴子の縄をひかゆる　孤屋
ちくはつくと菜の揚場の仍疎り　芭蕉

月の出まつりのつれの猫ちらさく　野坡
そろ〳〵の花乃二番内外付く　孤屋
端炭此ちりさくら土用の風　利牛
芭蕉　野坡　孤屋
利牛　各九句
雪の空お生にみえて常盤し　杉風
日の出るやくの森さみや音　孤屋
下がる蒼を一舟渓を寺晴く　芭蕉
あつさしさつらし太名の供　子珊
身をあつる風もふりく茄子秋　桃隣
里とりしれくひろき畠地　利牛

菱谷は読きれける秋乃水　嵐冬
笹よしらくて鉢子れ吾くる　野坡
二三疊寝所あり娘門の振　子珊
ゐる乃若抱のさりる千りの　沾圃
竹の皮雪踏に替へる夜は生て　石菊
稲子のさん雨乃そろく　杉風
山出荷ね一人もみえぬ浦の秋　野坡
めつさり風のそゆるくさ色　利合
赤く乃肉をかくちて旅大工　依々
背中へのおる咒をくハゆる　桃隣
草山しるれきく台く上手ちりて　子珊
判りつとくは小鉢つる　石菊

名

虹日雲されくゞる降りき流れ出る　杉風

参りくへ日れて山へ行けり　岱水

物和りむ身で搖くに親かゝり　孤屋

流し来にんで八和尚き積昔白　曽良

餅米を搗く信へえりの辺　桃隣

わさくつくもく莫代の我　信々

留守て若くバと自惚てきたらし　沾圃

とまつくりく火をとゝって来る　子珊

又けさも俳の会くゞ時を明　利牛

掛てうりしき賃で行かん　杉風

大坂此人はすれる雪の月　利合

酒をどまれて祖母の寄まへ入　野坡

すゝ夢みる流家の笛の吹けつり　子珊

次此小彩座てつまむせる声　利牛

能楽ようしみて咲れ八坂に咲れ　曽良

七つのうねふかいの料理をいれ　杉風

茶の白あふそふ御手洗出して　桃隣

男まじりに遊ぞろゆる　岱水

杉風五　野坡三　孤屋二

沾圃二　芭蕉一　石菊二

子珊五　利合二　桃隣四

信々二　利牛三　曽良二

岱水三

我さ見ぬむかしの道をしたふまく千金の浪紙
言けさ岩比山の野紙記しのかきもの名に残る
うたまくれの住よし紙にうえく見る山の香をり紙
見とせるやまめくはくさ舞秋摩洲のふふく
つとのうるかゑのみとらしめまつきのそのもしく
まほ河のきうくらみのうまるうきうのうちらし
言の行のれと守とらえそのきとのりとかきのふ紀
引をかまん二人りそのくふのえ多紀
世の桜乃雲をおくし吉野の嵐をそのめ
る人まうゑく多の筆 情のききすしき 柳桂

撰者芭蕉門人
志太氏 野坡
小泉氏 孤屋
池田氏 利牛

芭蕉の[illegible]

[illegible]

大鵬館主人[illegible]

長月乃頃

俳諧書籍目録　鵲仙堂蔵板

俳諧七部集	冬の日　春の日　ひさご　猿蓑　続猿蓑 炭俵　あら野	半紙本七冊
同　続七部集	深川集　卯辰集　其袋 有磯海　小文庫　千鳥掛	小本二冊
其角七部集	虚栗　新山家　花摘　萩の露 [illegible]　[illegible]　続虚栗	小本二冊
蕪村七部集	其雪影　明烏　一夜四歌仙　桃李 続明烏　五車反古　花鳥篇	小本二冊
芭蕉翁発句集		小本二冊
奥の細道	芭蕉翁紀行	大本一冊
[illegible]	支考選	一冊
続五論	同	一冊
笈の小文	芭蕉の紀行	一冊
枯尾花	其角選	二冊

紀伊乃字波抄　北辺大人口授　有国識　今小抄六冊
[illegible]

類題和歌白雲集　[illegible]選　五冊

彩[illegible]集　同選　五冊

華実年浪草　十五冊

[illegible]
芭蕉翁古郷傳　有国撰
[illegible]

新百箇　[illegible]　一冊

[illegible]
合類大節用集　[illegible]　十二冊

安永三年甲午五月發刻
文化五年戊辰五月再刻

皇都書舗

野田治兵衛
浦井徳右衛門
筒井庄兵衛